

## 《学部発信》

専修大学の6学部では、「社会知性の開発」に必要な基礎学力と専門性の高さと、学生の個性と創造性をはぐくんでいます。このページでは各学部独自の「魅力」を紹介します。

[ [経済学部](#) | [法学部](#) | [経営学部](#) | [商学部](#) | [文学部](#) | [ネットワーク情報学部](#) ]

## 経済学部

### ◆経済学科◆

#### 「少人数」できめ細かく 定着したコース制教育

経済学科コース制も5年目を迎え、ようやく定着してきました。この間の経験を踏まえ、来年度はいくつかの小規模な改正を行います。共通科目に「経済組織論」、コース科目に「ゲーム理論」が加わります。



▲泉留維ゼミの田植え活動

経済学は間口の広い学問であり、多様な分野の科目が用意されています。学生は多様なメニューの中から、何を選べばよいのかという困難に直面します。そのため、学生は「単位の取りやすい科目」に流れがちであり、結果として特定の科目に履修者が集中し、大人

数クラスが多くみられることになりました。コース制の目に見える成果は、そのような大人数クラスが激減した、という点です。学生はそれぞれのコース科目を中心に履修計画をたてています。

教員の側にも変化が現れています。たとえば、コースの教員たちが定期的に会議を開き、コース教育のあり方やコース科目相互間の連携について議論を交わすということが行われるようになりました。今後はこのような成果を定着させ、コース制をより充実させることが必要です。

導入科目の目玉である「入門ゼミナール」は、ほとんどの教員が担当することで開講数を増やした結果、少人数できめの細かい教育ができるようになりました。この科目も担当教員が随時集まって、さまざまな問題点について討議を重ね、改善のための努力をしております。昨年度から組み込まれた「キャリア教育」の時間などもその成果です。

(石塚 良次)

### ◆国際経済学科◆

#### 多彩な地域研究へ ゼミ・研修活動も活発

基本的な経済学の枠組みとコミュニケーション能力をもとに、世界の多様な地域研究ができるのが国際経済学科の大きな特徴です。欧米一辺倒ではなく、アジア、アフリカ、南米地域のスペシャリストを教授陣に、豊富に揃えている学科はほかではみられないでしょう。環境、開発、民族、女性といった学生諸君の新しい問題・関心にも対応できるカリキュラムも整備してきました。またセメスター制と少人数教育のもと、懇切丁寧な教育を心掛けているのも利点です。

勉強の中心はゼミナール活動。例えばフィールドワークを重視する環境問題の「泉留維ゼミ」はユニークな活動で人気を博しています。

昨年に開講した「海外特別研修」は本年度から二展開となり、軌道に乗ってきました。初年度、飯沼健子助教授が指導したタイ、ラオスでの研修では、地場産業の視察のみならず、現地大学生との交流などがプロ

グラムに組み込まれ、参加学生は貴重な異文化体験に大いに触発されたようです。これらの学生は、継続的に国際協力を実践するサークルを自発的に立ち上げています。

本年度はさらに永島剛講師によるイギリスでの特別研修がスタートしました。このプログラムの立案には、本学の協定校からの客員教授の尽力が得られ、企業視察のみならず、英国議事堂の視察や政界人との懇談が実現しそうです。このプログラムには本学からの資金援助もあり、安全面には万全の注意を払いつつ、本学科の目玉授業になっていくことが期待されます。

(加藤 浩平)

[ 学部発信：経済学部 | 法学部 | 経営学部 | 商学部 | 文学部 | ネットワーク情報学部 ]

## 《学部発信》

### 法学部

#### 1年次で基礎文献講読 スタートした政治学科

法学部では、本年4月に政治学科がスタートしました。現在152人の一期生が生田キャンパスで学んでいます。今回は、政治学科の初年度教育について紹介します。

政治学科のカリキュラムの特長は、なんといっても1年次から4年次まで一貫した、少人数クラスによる演習教育にあります。「読解力・発言力・文章表現力」を養うため、受講生に「読むこと・話すこと・書くこと」が求められる演習科目は、通常2年以上に配当されることが多いのですが、政治学科では、それが「基礎文献講読」として、1年次の4月からスタートします。



▲政治学科の講義風景

#### 2科目“入門編”で基礎固めを

政治学科1年次の必修科目には、「政治学の基礎」と「国際政治の基礎」があります。この2科目は、いわば政治学の入門編であり、政治とは何か、政治学とはどのような学問かを理解する上で、非常に重要な位置を占めています。したがって、その講義内容を十分に習得できるか否かが、2年次以降の学習に大きく影響してきます。

「基礎文献講読」は、前記2科目の講義と連動したテキストを用いることによって、受講生の講義への理解を深めることを目的の一つとしています。また今日の情報化社会では、情報の大海に溺れることなく、主体的に物事を捉える力、他に向けて自らの考えを発信する力が必要とされていますが、「基礎文献講読」は、このような能力の育成も目標としています。

#### 活発な議論、レポートも

「基礎文献講読」では予習が重視され、受講生には、授業に先立ってテキストを読み、その際に感じた疑問や意見をコメントカードにまとめて提出することが求められます。そして、あらかじめ指名されたテキストの内容を報告するレポーターと、自分なりの視点から論点を提示するコメンテーターを中心に、受講生の間で活発な議論が交わされます。教員は議論のリード役に徹し、受講生からなるべく多くの発言を引き出すように努めます。

そして、1冊のテキストを読み終えるごとにレポートの提出が求められます。教員はレポートを読んで文章を添削し、論旨に関するコメントを付記して受講生に返却します。

#### 授業のたびに手ごたえ

大学に入学したばかりの1年次生にとって、「基礎文献講読」の授業は、かなりハードに感じられたようです。しかし、授業の回を重ねるにつれて、発言の態度も内容も頼もしさを増し、レポート作成の能力も少しずつではありますが確実に進歩しました。

「指名されてもすぐに言葉が出てこない」、「レポートの書き方がわからない」、「授業についていけない心配」と言っていた受講生たちが、まだまだ手探りの状態ながら「後期の『基礎文』もなんとか頑張れそう」と言うまでに成長しました。「鉄は熱いうちに打て」という格言の正しさを、身をもって証明しつつある1年次生たちの今後のさらなる成長が期待されます。

(杉本 肇美)



## 《学部発信》

### 経営学部

#### 社会で輝くチカラを育てる！「新カリキュラム」開始

2007年度から経営学部の新しいカリキュラムがスタートします。何を  
目指しているかについてご紹介したいと思います。

経営学部では、コンピュータ教育の充実、導入教育の拡充、企業  
研修及び、業界トップの実務家による提供講座の実施など、時代の  
最先端をいく取り組みを行ってきました。新カリキュラムにはこれ  
らに加え、新しい仕掛けが含まれています。

#### 「自信のないもの」強化

社会は大学に対して何を求めているのでしょうか。

経済産業省が今年行った「社会人基礎力に関する緊急調査」を見てみましょう。それによると、企業は専門  
知識をもちながら、「物事に進んで取り組む主体性」や、「目的を設定し確実に行動する実行力」、「現状を  
分析し目的や課題を明らかにする課題発見力」、「新しい価値を生み出す創造力」を求めています。ところが、  
大学生へのアンケートによると「主体性」や「実行力」「課題発見力」「創造力」はいずれも自信のないもの  
という結果が出ています。つまり企業が求めている能力と学生との間にはギャップが存在しており、大学  
はこのギャップを埋めていかなければなりません。

近年、経営学部では専修大学が掲げる21世紀ビジョンである「社会知性の開発」を反映させた「理論と実  
践の融合」という教育理念を掲げ、学生が学んだ知識を活かし、社会に貢献できるよう取り組んできました。

このことは、社会が求めている「主体性」、「実行力」、「創造力」「課題発見力」を育成することにほかなりま  
せん。課題を発見するためには、専門知識が必要です。さらにそれらを基盤として主体的に取り組み、自ら  
見つけた問題について創造力を伴って解決策をねり、提案する実行力が必要なのです。

そこで、経営学部では、テーマ制という専門知識を学ぶ、ほかではみられない仕組みを築きあげました。同  
時に、そこで学んだ知識を活かすスキルを養うとともに活用する場として、学生と教員との双方向性を実現  
する演習科目に工夫をこらしました。

#### テーマ制で専門知識学ぶ

専門科目は、実際のビジネスの現場に直結した10のテーマに分類されています。このうち二つのテーマを  
修得してもらうことにしました。これによって45通りの組み合わせができます。どのような組み合わせにする  
かは、学生が主体的に考え、選んでもらいます。その結果、友達とは異なる自分だけの専門領域が作られ  
ます。就職活動でその思いを伝えれば、好感度間違いありません。

#### 実践力養う双方向授業

学んだ知識を活かさなければ、理念を実現できませんし、また社会で求めている能力も身につけません。  
能力を培う基礎演習に加えて、知識を活かす場としてゼミナールにはもちろん力を入れました。さらに、ゼミ  
以外にも学生自らが問題を見つけ、解決策を考え、提案する科目を用意しました。その結果、1年次生から  
4年次生まで途切れることなく実践的な科目を複線的に配置することができました。詳細は**経営学部のHP**  
をご覧ください。

どんな学生がこれから経営学部に入學し、どのように育っていくのか、今からとても楽しみにしています。

(馬場 杉夫)







## 《学部発信》

## 商学部

## 日々接する社会を学ぶ 経験と授業はコインの表裏

子供の頃、練習の末に初めて逆上がりができたとき、一輪車に乗れたときの喜びを覚えていますか。ちょっと成長できたこと、努力が報われたことが、たまらなく嬉しかったことでしょう。大学での学びも同じです。今まで知らなかったことを知る、できなかったことができるようになる喜びに満ちています。

商学部での学びは、実社会での経験と深く結びついています。皆さんは消費者・生活者として、日々多くのことを経験しています。たとえば、コンビニエンスストアで買い物をする。雑誌売り場はどこにあるでしょうか。必ず道路に面したガラス窓の前にありますね。では、化粧品やシャンプー・歯磨き売り場はどこでしょうか。必ず雑誌売り場の向かいにあります(お店で確かめて下さい)。なぜでしょう。理由は、消費者の心理や行動にあります(答えは授業で…)。株式投資をしたことのある人もいます。どんな株式に投資したらよいでしょうか。業績の良い企業を発見する(財務諸表分析)、投資家の心理を分析する、株式市場の成り立ちや構造を知る(ファイナンス)ことなどにより、よりの確な投資ができるようになります。

商学部では、皆さんが日々接している社会やビジネスについて学びます。社会での経験が大学の授業をおもしろくし、大学の授業が社会で活躍する能力を高めます。社会での経験と大学の授業は、コインの裏と表です。それを理解すると、学びは楽しいものになり、大学は成長の場になります。

## 商学教育・研究のパイオニア

専修大学商学部は、今から100年以上昔、明治38年(1905年)に創設された商科を起源としています。同時期に、早稲田大学、明治大学、中央大学、日本大学などでも商科が創設されました。これらの大学と共に、商学のパイオニアとして教育・研究をリードしてきました。

専修大学商学部は、会計学科とマーケティング学科からなり、マーケティング学科はさらに、マーケティングコース、ファイナンスコース(金融を中心に学ぶ)、グローバルビジネスコース(経営学を中心に学ぶ)、ビジネスインテリジェンスコース(経済学・情報学を中心に学ぶ)に分かれています。

全体で74人もの教員がいるため、会計、マーケティング、ファイナンス、経営、経済、情報など、皆さんの多様な志望に広く深くこたえることができます。大学で学びたいことが既に決まっている方には、1年次から高度な専門教育を行います。

## 日本有数の教育水準

大学には、それぞれ特徴があります。専修大学商学部には、会計とマーケティング分野で、日本で最も多くの教員がいます。これにより、他大学に比べ、会計・マーケティングを幅広くかつ深く学ぶことができます。もちろん教員の数だけではなく、教育や研究の質においても、日本有数の水準にあります。

「計理の専修」の名にふさわしく、会計学科では多くの優れた教員により、1年次から密度の濃い専門教育を行っています。また、マーケティング分野においては、企業の社会的責任、環境マーケティング、地域マーケティングなどを含め、先端的かつ実践的な専門教育を深く学ぶことができます。さらに、ファイナンス分野においては、実践と理論のバランスのとれた教育を行っています。会計、マーケティング、ファイナンス、ビジネスなどに興味を持つ皆さんには最適の学部です。

専修大学商学部では、皆さんの社会経験に基づいた興味や関心を活かしながら、幅広く深い教育を受けることにより、優れた専門的能力を獲得できます。そして、在校生の高い能力は社会からも大いに評価されています。たとえば、首藤昭信ゼミナールでは、会計情報を活用した投資戦略の提案により、「日経STOCKリーグ」(株式投資コンテスト)で連続入賞しました。また、渡辺達朗ゼミナールでは、地域との交流を通じたショッピングセンター活性化のための提案により、ショッピングセンター協会主催の研究発表大会で準優勝しました。

専修大学商学部に少しでも興味を持ったなら、商学部入学パンフレットを見て、オープンキャンパスや模擬授業に来て下さい。学ぶ楽しさと成長する喜びを実感できることでしょう。

(熊倉 広志)

[ 学部発信：経済学部 | 法学部 | 経営学部 | 商学部 | 文学部 | ネットワーク情報学部 ]



## 《学部発信》

## 文学部

## 学問の魅力、学外に発信 二つの教育プログラム

専修大学文学部は、1966年4月に創設され、本年度創立40周年を迎えた。

ここに到るまで文学部は、学生を基本に据えた学部教育の充実をはかるために、教育組織の再編、カリキュラムの見直し等を進めてきた。2006年4月から新カリキュラムによる教育が始まり、文学部最大の特色のひとつである「学生の顔がみえる」少人数教育を、これまで以上に充実させる教育体制をスタートさせることができた。

## 充実する市民講座

こうした学部教育の充実・発展に努力を重ねる一方で、専修大学文学部は、創設以来の「文学部公開講座」をはじめとして、文学部の各学科・専攻の教員が中心となった一般市民向けの「The寺子屋」(古文書講座)、「歴史をひもとく」、「文学の森」等のシリーズの公開講座や「シルクロード探検」や文学部教員が中心となっている二つのORC事業(「フランス革命と日本・アジアの近代化」、「Anglo-Saxon語の継承と変容」)両プロジェクト)が開催するシンポジウム等を含め、質量ともに充実させてきている。

こうした市民向けのプログラムとは別に対象をより限定したプログラムが、04年7月からスタートした英語英米文学科の教員による「高校生のための英語学習法」である。

## 高校をターゲットに

これは、土曜日を利用し、目線を高校生におき、大学教員が学生の英語力アップを支援することを通じて英語の魅力、英語学習の楽しさを味わってもらおう試みである。休憩時間や帰宅時に声をかけた高校生の満足げな顔と「楽しかった！」の声や、アンケートでの反応を読むと、当初のねらいはほぼ成功していると実感できる。

これらに加え、40周年の節目を迎えるにあたり、文学部は、新たに、公立・私立の高校教育現場の先生方と密接に提携し、その相互交流・相互啓発を進めるため、7月29日(土)から8月2日(水)まで生田キャンパスで2006年度専修大学「高校教師対象 研修プログラム」を実施した。

これは、専修大学が21世紀ビジョンとして掲げた「社会知性の開発」をめざし、「地域社会との連携」を深めるための文学部の新たな試みである。

同プログラムは、専修大学130年記念事業に協賛し、加えて、文学部創立40周年記念事業のひとつとして、英語英米文学科、人文学科哲学・人間学専攻、歴史学専攻、環境地理学専攻の先生方による合同企画として実現したものである。この研修プログラムは、インタラクティブな対話型教科研修プログラムを用意することで、英語・倫理・世界史・日本史・地理等の教科が本来もつ魅力をどのように引き出しうるのか、研修を通して、そのためには何が必要なのか等々を確かめ合うことを目的としている。

幸い、総計で100人近い応募があり、教科によっては新潟、静岡からの参加もみられた。実施期間中を通じて、高校教員との対話が実現し、専修大学の姿を直接知ってもらう機会が増えたことになる。

学部への志願者減が深刻になっている。その対策に特効薬はない。実行を伴わない「評論」に終始しては行かない現実を踏まえるならば、学生・市民を意識して、独自のプログラムとして創設し、学部がもつ学問の魅力をどれほど伝えられるかを問いながら打開の途を探るほかない。紹介した文学部の二つのプログラムは、こうしたねらいも込めて始めたものである。

(荒木 敏夫)



## 《学部発信》

## ネットワーク情報学部

## 実社会で通用するものを 学生達が切り開いてきた

7月のある暑い日、多摩区の登戸小学校の教室に、三十数人の小学5年生と、50人を超える大学2年次生が集まった。大学生が制作したハガキ大のカードやウェブサイトなどのコンテンツを小学生に見てもらおうというのだ。今年度前期のCD(コンテンツデザイン)基礎演習では、FIELD LIBRARYと題して、生田緑地で発見できる自然に関する興味深い出来事を取り上げ、自然への理解を深めてもらうことを目的にコンテンツを制作した。

3人のグループごとに、生田緑地でフィールドワークを行い、アイデアを出し合い、テーマを設定して制作を進めてきた。1本の木に集まる鳥や虫を取り上げたり、地層に着目したり、植物を使った昔ながらの遊び方を紹介するなど、多彩なコンテンツが出来上がった。ユーザーである小学生が、実際にそのコンテンツを見てどう反応するか、期待通りに自然への興味を深めてくれるだろうか。短い時間ではあったが、小学生も大学生も、真剣にやりとりをすることができた。ユーザーの反応を目の前で受け止める、これによってコンテンツ制作の意義や困難さを、学生はしっかりと学ぶことができたはずだ。

## プロセス重視の学習

各コースの基礎・総合演習は、2年次生の基幹科目である。CDコースの場合、バックグラウンドの異なる7人の教員が、議論をしながら毎年内容の改定を重ねてきた。特に重視しているのは、コンテンツ制作のプロセスだ。ターゲットユーザーを想定した企画立案、フィールドワークによる調査、グループワークでの協力と責任、ユーザーテストによる評価、そしてリフレクション。そうしたプロセス全体を経験することで、目標達成のための個々のステップのつながりが明確になる。CDコースに限らず、ネットワーク情報学部の学びは、知識やスキルの習得だけが目的ではない。それらを応用して、実際に社会で通用するものを目指している。産官学連携を推進したり、さまざまな発表の場を設けたりしているのもそのためだ。社会とつながる学びの意義を学生自らが意識し、そういう学びの面白さと責任の重さの両方を学生たちが自覚したとき、本当の意味で学びが始まる。

## 「学び」の先を目指す

プロジェクトや卒業制作の発表会が充実してきたのを受けて、7月23日に、はじめてオープンキャンパスで学部フェアを開いた。学生たちの成果を見て学部を知ってもらおう、というわけだ。2~4年次生まで、十数グループが展示に参加した。教員が参加者を募るスペース配分を決めれば、展示の準備や来場者への説明は、学生に任せて心配ないくらい、学生たちは発表がうまくなっている。実は、自分たちの成果を積極的に世に問う場を最初に切り開いたのは学生だった。1期生の有志が卒業を前に自主的に開いた「コウサ展」は、後輩によって引き継がれ、来年3回目を迎える。

学ぶだけ、作るだけに終わらない、世に問うことが学びの先にある、それがネットワーク情報学部の教員と学生が目指しているものである。

(山下 清美)

[ 学部発信: [経済学部](#) | [法学部](#) | [経営学部](#) | [商学部](#) | [文学部](#) | ネットワーク情報学部 ]

## オープンキャンパス

「オープンキャンパス」が7月23日、生田キャンパスで開かれ、昨年度より多い約3200人の受験生、父母、高校教員らが来校した。

### ●ネットワーク情報学部フェアを開催

また、ネットワーク情報学部では同日、「学部フェア」を開催、演習の成果、作品、アイデアを学生たちが各ブースに別れてPRしたほか、AO入試の説明会も行われた。



▲盛況だった学生スタッフによるトークショー



▲人気の心理学実験室見学



▲ネットワーク情報学部「学部フェア」